

お金の価値

神奈川県・横浜市立南希望が丘中学校 3年 木村 遥希

「震災募金、お願いします。」

今年の3月、僕の住む横浜でも至る所で聞こえてきた声である。いつもの募金であれば、何も考えずに親にもらった100円を1回募金すれば終わり、という僕であった。しかし、今年は違った。

駅前の街頭募金の前で、僕は足を止めた。いつものように母にもらった100円を募金箱に入れた。

「ありがとうございます。被災地の方々のために役立たせていただきます。」

笑顔でボランティアの人にお礼を言われた。良いことをしたはずなのに、なぜか気持ちが晴れなかった。家までの帰り道、3月11日に起こった東日本大震災のことを考えた。被災地程ではないが、僕の住む横浜でもかなり大きな揺れを体験した。テレビの映像でしか知らないが、東北地方の壊滅的な被害は、その時感じた揺れからは想像できないくらい大きいものだった。もし、自分があの地震と同じ被害を受けていたとしたら。考えれば考える程、僕が募金した100円は無意味なものに感じられた。なぜなら、僕の心の中には被災地の人のために自分にできる何かをしたいという気持ちがあったからだ。それは母にもらった100円で募金することではなかった。

家に着くと、僕は真っ先に母に言った。

「今日から、家で何でも屋のアルバイトをしてもいい。」

「突然どうしたの。何か欲しいものでもあるの。」

母はびっくりした顔で僕に聞き返した。僕は、「被災地の人のために、できることをしたいんだ。現地に行って手助けできないから、せめて気持ちのこもった募金をしたいんだ」と、自分の思いを伝えた。

その日から、僕の何でも屋生活が始まった。目標金額は、僕の1か月のお小遣いと同じ、1,000円に決めた。お風呂掃除や庭の草むしり、ごみ出しなど何でも

頼まれたことをやって、1日100円を母からもらった。1か月のお小遣いとしてもらっている時は少額と軽んじていたが、いざ貯めるとなると大変であった。しかし、お金を貯める目的があったので、何でも屋生活は苦ではなかった。こうして僕の何でも屋生活が10日間続いた。

募金のためのお金を貯め始めて10日目の夕方、やっと目標の1,000円に達した。貯めた100円玉を10枚握り締め、僕は街頭募金の場所まで走った。

「震災募金、お願いします。」

前回と同じ声が聞こえてきた。僕は、1枚1枚気持ちを込めるように100円玉を10枚募金箱に入れた。

「ありがとうございます。」

募金箱を持つボランティアの人の声が、被災地の人のお礼のように聞こえた。僕はうれしかった。

1,000円という額は僕の1か月のお小遣いであり、僕の思いを込めた募金でもある。当然のように親から与えられていた1,000円は、物を手に入れるための交換する紙でしかなかった。中学3年生のお小遣いとしては少ないと不満ばかりこぼしていたが、今思えば、本当に欲しいものを手に入れるために使っていたかも疑問である。しかし、募金のために貯めた1,000円は、物を手に入れるための交換する紙ではなかった。被災地の人達のために何かをしたいという思いから始めた家での何でも屋の仕事。その仕事をする中で、目標の1か月のお小遣いと同じ1,000円を貯めることができた達成感。そして、募金という形で自分の思いを実現できた幸福感。僕は物を手に入れる以上の価値を感じることができた。自分のためではなく、誰かのために使うお金としての一つの価値を実感した。

生きていく上で、ものを手に入れるためのお金は必要である。しかし、ものがあふれ簡単に手に入れることができるようになった今、お金はただの交換する紙ではない。何か目的を持ち、そのために使うことで、自分にとっても社会にとってもお金の額以上の、価値あるものになると思う。将来の夢を実現させるために使うこともあるだろう。時には人を助けるために使うこともあるだろう。常に何のために使うお金なのかを考えながら、価値を感じられるお金の使い方をしていきたい。